

H. J. ラスキの「アメリカ論」

H.J. Laski's Theories of America

梶沢 栄一

GUMISAWA Eiich

This article refers to H.J. Laski's theories of America. In 1916 he had started teaching politics at McGill University in Canada, and soon removed to Harvard University at Boston. He stayed in America for 6 years. He had got many American friends who were very intellectual and clever and promoted friendly relations with them. After his going back to England, he returned to America often to lecture at universities. His theories of America had formed in these environments. I am going to analyze his ideas of relationship between the interests and valuations of America and his ideas of a tense international relationship that was changing as that pass. His view point as a Democratic Socialist is very useful for an analysis of America especially at the time when he was criticized by American liberalists and democrats. Finally I am to refer to the differences of their ideas in Tocqueville's, Bryce's, and Laski's American Democracy.

1. はじめに
2. 北米への旅立ちと出会い
3. 「アメリカ論」構築への思想的基盤
4. アメリカへの関心と評価
5. むすびにかえて

1. はじめに

戦後のイギリスとアメリカの関係を見ると、興味あることに気づく。それは労働党政権の時に、

アメリカとの関係が戦争というファクターを媒介に強化されるという関係である。1945～51年のC.アトリー内閣の時には朝鮮戦争が始まり、アメリカでは1945～53年まで民主党のH.トルーマンが大統領と勤めた。1964～70年のH.ウィルソン内閣の時にはベトナム戦争が激化し、1963～69年民主党のR.ジョンソンと1969～74年共和党のR.ニクソンが大統領の就任時期である。1997～2007年のT.ブレア内閣ではイラク戦争の勃発に符合する。アメリカはこのときの政権は2001～8年のG.W.ブッシュの共和党である。戦後イギリスの労働党政権は、アメリカが主導する戦争と縁があるように思われる。歴史の偶然と言えればそれまでのことだが、このような国際関係に象徴されイギリスとアメリカの関係は一体どのようなものか、またなぜ労働党政権時に歴史に残る戦争が起こるのか、興味尽きないところである。もちろんH.J.ラスキはアトリー内閣の理論的指導者であり、アメリカとの外交関係に積極的に関わりをもたことも事実である。朝鮮戦争はイギリスにとっては地球上はるかかなたの地域での戦争であったが、ラスキはこの戦争の開戦3ヶ月前に亡くなるのである。もし早逝しなかったらこの戦争に何を思ったか問いただしてみたい気もする。アメリカを生涯愛し、アメリカに多くの友人を持ち、アメリカの将来に期待を寄せていたラスキであっても、おそらくこの戦争に厳然と異論を唱え、東西冷戦という暗い時代の幕開けに計り知れない不安を覚えたのではなかろうか。

議院内閣制のイギリスと大統領制のアメリカは、政治の制度上で根本的に違う二つの制度ということになるのであるが、地方分権制度や、さらにコミュニティーの行政理念には多くの共通点も見られる。特にブレアの時代の地方分権の成果や市民による町づくりの成功は、新しいイギリスの政治モデルを提供するものであった。⁽¹⁾ 他方アメリカではコミュニティーの思想はイギリスより古い伝統を持つことも確かである。これはまさに民主主義の原点として脈々とした伝統の上に立つものであるが、その内部的変化が生じ、新たな市民社会の構築が問われていることも興味深いところである。⁽²⁾ 9.11.以降アメリカの世界的権威が失墜し、その修復も間々ならぬうちにまた国際金融の世界で歴史上皆無の危機を引き起こした憧れの国アメリカはどこに行くのか。人々は強いアメリの時代とは違った意味でアメリカに注目をよせている。そして今迄で伝えられなかった裏面史にまでも今日注目が集められ、昨今多くの著作が出ている。⁽³⁾

さて、H.J. ラスキ (1893～1950) はアメリカにどのような形でかわり、時の米英の政治との関係、政治制度の違い、政治の精神的風土の違いなどをたどりながら、彼がどのようなアメリカ論を形成していったのかをこの論文で論考してみたいと思う。

2. 北米への旅立ちと出会い

青年期のラスキは、アメリカとイギリスを行ったり来たりの生活を通し、アメリカの様々な大学との関係をもち、そして、そこでの多くの友人にも恵まれた。その知的経験は彼の学問体系の基盤を形成するものであった。彼は1920年に帰国を余儀なくされるが、その後20年代、さらに30年代は1年に1回のペースで長短期の違いこそあるが、断続的にアメリカを訪問し、その過程で得た研究の成果を著作として多く残している。彼の生涯にわたる著作の多くはこのアメリカでの知見の影響が随所に見られる。40年代こそは戦争の影響で往来が不自由になるが、それがなければ不断にアメリカに出かけたと思われる。それぐらいアメリカは知的冒険心旺盛なラスキにとって魅力的な国だったのである。彼が亡くなる1年前の1949年が最後のアメリカ訪問となるが、それが最後の訪問になるとは彼自身微塵にも思わなかったであろう。それぐらいにラスキの死は突然に訪れたのである。

ラスキは妻を伴いカナダのマックギル大学に講師の職を得て、そこに到着したのは1914年9月であった。ラスキは21歳、妻フリーダは8歳年上の美貌と実行力にたけ、婦人参政権や産児制限、さらに社会主義に大いに関心を持った聡明な女性であった。しかしここでの生活は夫妻にとっては退屈でつまらないものであった。ラスキは最初の著作を書き、フリーダはフランスの政治的多元主義者デュギー⁽⁴⁾の翻訳をして彼に協力した。1915年、ラスキの新しい刺激と地位を求める限りない欲求は偶然のことから、ハーヴァード大学に移ることから実現する。この縁は、アメリカの劇評論家N.ハップグレードがたまたまマックギル大学に来学した時にラスキと語り合う機会があり、やがて彼はボストンに帰り、ハーヴァード大学の若い教授であり、後に合衆国連邦最高裁判所の有名判事になるF.フランクフルターに、並外れた博識と知性と弁舌の才能を持った一人のイギリス人ラスキのことを話したのである。間もなく彼らはモンリオールで対面し、即座に心と心が通うものがあつた。これ以降両者の交友は書簡の往復も含めて35年にも亘ることになる。

フランクフルターがハーヴァード大学の学長C. ハスキんにラスキを招聘することを熱心に薦めそれが実現することになり、1916年ラスキはハーヴァード大学の講師兼チューターに任ぜられることになったのである。彼は、ハーヴァード大学の生活を大いに満喫した。生涯の書籍蒐集の道楽も始まり、また親しい友人との語りも彼にとってはこの上もない楽しみであった。そこでは、フランクフルター判事と家族ぐるみの付き合いがあつたし、歳の差は52歳もあるが、これまた生涯の厚い交流がかわされるO.W. ホームズ判事との出会いもあつた。彼こそはハーヴァー

ド大学の教授から、マサチューセッツ州最高裁判事、連邦最高裁判事となり自由主義の立場から数々の有名な判決を出した人物である。⁽⁵⁾ また出版界では、B. ヒブシュと生涯に亘り交友があったし、M.R. コーエン教授一家との出会いもあった。ハーヴァード大学では最も優れた教授であったZ. チャフィー、そしてA. シュレジンガー・シニア教授、M.D. ホーウ教授とも親交を持った。学生には当時ラスキの教え子として、C. ブリントンやP. ミラーがいた。これらの人々はボストンの仲間であるが、ラスキは、デンバー、スプリングフィールド、スポーケン、シカゴなどにも多くの友人がいた。しかし、彼はアメリカ一般人との付き合いはそれほど得意ではなかったようである。むしろ知識階級やその中でもユダヤ人との交際が多かった。特に、各学界の研究者、ジャーナリスト、官僚、労働組合幹部、法律家などであった。また彼はアメリカ各地を観光の目的にして回るということはめったになく、講演の機会が最も多かった。その時には公式な席への出席はもちろんあったが、友人との語らいや食事、書店あさりなどが好きだったようである。

この当時のラスキの思想性について、著名なラスキ伝記作家の一人として名を残し、当時イギリスの週刊誌『ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション』の編集主幹であったK. マーティンは次のように語っている。「当時ラスキはアメリカ的な自由主義者だった。彼は弱者の味方で、労働組合や団体契約を支持し、フェビアン思想を持った自由主義多元論と、当時イギリスの進歩主義的インテリの中に勢力のあったギルド社会主義との中間にある穏健な意味での社会主義者であった」⁽⁶⁾ と。

1919年9月ラスキにとってはボストン滞在中に忘れることのできない事件がおこる。それは警察官のストライキである。9日の晩には全市に騒擾が広がり死傷者が出たり、商店が荒らされ、火災が起こった。そこで、マサチューセッツのクーリッジ知事はボストン市長の要請を受け州警備隊の出動しその沈静化を図った。しかし争議は1ヶ月以上も続き、市民は無秩序の現実社会とそれを誘発した政治的イデオロギーに恐怖を感じていた。しかし、イギリスから来たハーヴァードの若き教員で、急進的でしかもユダヤ人であるラスキは、このストライキを支持し、警察官を守る演説を警察官の夫人の会合で行うのである。その中身の一端を引用しておこう。

200人の人々が一つの原則のためにストライキをやっていることは注目すべきことである。13年間私はボストンの警察官の間に組合があると聞いていたが、それは何物をも成しえなかった。かくて、カーティス氏がその地位に就き、現存の組合を構成することを拒み、彼自身の組合を作りあげようとしている。

カーティス氏は、あなた方の仲間が取ったやり方を見守り、それを知っている。しかし、

彼が問題としたのは組合が作られたその時なのである。そうして彼はこの組合に入ってはならぬと告げた。2日前にやったばかりのことをやっただけとはいけないと言うのは、実に政治性のないやり方である。カーティス委員会は、8月9日と9月9日の間に何をしていたのか。何もしていない。しかも警察官を保護するのが委員の義務である。彼らはなすべき義務を何らしらないようである。彼はあらゆる時において警察官の悩みを考慮しようとはしない。

警察官は脱走者だといわれている。脱走者はカーティス委員会であり、かれはその義務を間違っ理解し、その職能を果たさない点ですべて罪がある。ボストン市民は200人の人が決って間違っではないという事実に目覚めつつある。人々が彼に懐柔されるなら、彼はその古い方式を依然として続けていくであろう。

今回の問題の結果として、公安委員会は労働者階級が今までよりさらに強く団結をしていることを知った。労働階級は決して降伏してはならない。⁽⁷⁾

このような行為は、ボストンの市中やハーヴァード大学の中でラスキへの注目度をいやおうなしに高めるものであった。特に大学での評判が著しく落ちるのである。同僚からの批判の声があがり学長にラスキの解職要求までだされる事態にまでなった。さらに、学内誌では彼を罵る汚い文章や悪口の類の幼い批評が次々と載ったのである。また、下品なユダヤ人排斥の漫画が論文の後に続く全ページを占めることもあった。若干25歳のラスキにとってこの出来事は長く暗い影を落とす事件であった。イギリスからアメリカにやってきて、学者として教師としてスタート台に立ったばかりの青年は、人々の自由、集会や言論の自由に大いに関心を持ち、その侵害に対して、決して妥協という言葉を知らなかった。また、その行為は若き青年にありがちな心情的な部分が多分にあった。その証拠に、当時のラスキは、労働組合運動には深く関わった経験があるわけではなく、まだ確固たる明確な自らの政治学説を持っていたわけでもなかったのである。しかし、この事件を通して、彼は裕福な支配階級と労働者の関係、財産と権力の関係などアメリカの現実から学び、後の彼の政治学形成への一助としていくのである。

1920年ラスキは妻フリーダとイギリスに帰国することになる。それはボストンでの警察官ストライキ支持が大学や世間で物議をかもし出したのは確かだが、それが原因でハーヴァードを強制的に辞めさせられたものではない。また彼が自らアメリカに失望して去ったものでもない。むしろアメリカに深い愛着を感じていた。そして、この気持ちは生涯続いたと言ってよい。ラスキにとっては多くの友人を得ることのできた6年間であったが、同時に学問的成果もあった。その結果として彼の初期の大作と言われている「主権三部作」⁽⁸⁾の二つはアメリカでの研究生活の中で仕上げている。これ以後も特に1930年代がそうであったが、彼のアメリカ訪問とアメリカ人に向けての発信は続くのである。

もちろん彼の純粋な学問的探究心や政治家としての行動性が彼を突き動かしていることには間違いはないが、多少は世俗的な動機もあったと言われている。つまり、アメリカでの講演料はイギリスと比較にならないほどによかったのである。その収入の多くをスペインの難民に寄付している。今の日本の金額にすると1億円ぐらいになると言う。⁽⁹⁾ この辺がまたラスキの破格的性格として興味あるところである。

1920年の夏からイギリスではロンドン・スクール・エコノミクス (L.S.E. 現在のロンドン大学) での講師の仕事が待っていた。この招聘には当時労働党に関心を持っていた学長のハルデーン卿がかなりの労力を払ったといわれている。6年間のアメリカ生活を終え新たなスタートを切ったラスキであったが、アメリカでの経験は多くの友人との親交とそれにより学識を深めることができた。ホームズ判事、ブランディス判事、そして最も深い親交を続けたフランクフルター判事らはラスキのアメリカでの生活を打ち切ることへの慙愧の念と今後イギリスでの活躍に限りない期待をよせている。そしてそれは1920年代の主著といわれる『政治学大綱』⁽¹⁰⁾として著されることになる。これはコロンビア大学で出会い、オックスフォード大学の先輩で1934年にアメリカに帰化したR.M. マキィヴァー⁽¹¹⁾に多分に影響を受けるものであった。

ラスキとアメリカの関係は、晩年においては必ずしも良好なものではなかった。それは最後のアメリカ訪問の時にある事件が起こった。衣料労働組合のシドニー・ヒルマン財団の後援による講演旅行の最中、カルフォルニア大学での講演拒否事件が起こったのである。総長のC.ディクストラの失態もあるが、左翼的発言を繰り返すラスキは、当局の警戒を気にする大学首脳陣には疎まれる存在だった。この当時アメリカではすでに共産主義や社会主義に対する怪しい風がふきはじめていたのである。この旅は、ラスキにとっては複雑なものになった、好きなアメリカであるが、そのアメリカは思想の自由や言論の自由が制限される社会状況になったこと。しかも、最も思想と言論の自由が尊重されるべき大学という世界で起こっていること。この旅は彼のアメリカ最後のものとなるのであるが、それは、あまりにもラスキを失望させる皮肉な旅に終わってしまったのである。

3. 「アメリカ論」構築への思想的基盤

ラスキのアメリカ論を検討する前に、彼のそれに対する思想的基盤をここで検証しておこう。

(1) 政治思想

ラスキの政治思想は、彼の生涯において何度か変化をしていることは通説となっている。この変化を3段階に分けるもの、4段階に分けるもの、5段階に分けるものもあるが、拙稿においては4段階分ける立場をとってきた。⁽¹²⁾3段階に分ける説はC. ホーキンスなどがとっているが、それは、多元主義の時代—民主的集産主義の時代—マルクス主義の時代と分けるものである。⁽¹³⁾また、H.A. ディーンは五段階説を主張し、多元主義—修正多元主義—修正マルクス主義—社会民主主義と変化をしたと主張している。⁽¹⁴⁾

4段階は次のように分けられる。第1段階は1910年代後半に政治的多元主義を主張した時代で、「主権三部作」が書かれた時期である。これはラスキの政治思想の原基となるもので、リベラルかつプurlラリステックなものであった。第2段階は1925年を中心にして彼の最も著名な著作として、また彼を政治学者として世界的に有名とならしめた『政治学大綱』が出版された時期である。国家と集団と社会の権力構成関係を政治学として確立した時期である。第3段階は1930年代を中心に展開されたもので、世界の政治的環境と多分に関係しているものであった。この時期の著作である『国家—理論と実際—』はマルクス主義に最も接近した思想といわれているもので、その視点からファシズムの台頭や迫り来る戦争危機に対して新たな理論を展開するものであった。第4段階は彼の晩年になる1943年以降の思想である。『現代革命の考察』に現れている思想は、「同意による革命や」や「計画民主主義」をキーワードに新たな政治論を展開するものであった。ソ連に対する憎悪と愛着、独裁制と暴力政治への強い警戒心の中で、展開された新たな思想であり、また未完の思想でもあった。このように変化していくラスキの政治思想に対して、賛否両論がある。一つは、この変化をマイナス評価し、思想の一貫性こそが重要だとし「連続性」を強調するものである。もう一つは、一貫性や連続性よりも、その時代への正確な分析と予見を評価するものである。ラスキ自身の思考方法にまで遡れば、また、哲学的視点で考察すれば、プラグマティズムにまで行き着くことになる。これはラスキが若き時代に実際にアメリカの地で学び、前述したような様々なアメリカ人からの影響を物語るものであった。その基本は多元的思考と動態的思考を基本的特色として、一元論的世界観を否定するものである。一元論者が真理を唯一のものとし、絶対的で不変なものと考えることに對し、多元論者やプラグマティスにとって、真理は複数多元的に存在し、そして、それはまた経験という時間の流れの中で生成されていくものだというのである。

さて、この連続性と非連続性の問題提起に対して、別の角度からの問題提起もある。丸山真男氏はその点で卓越した見解の持ち主であった。彼によれば思想家というものは、新たな事実と経験によりその思想は吟味され、修正されていくものであるから不変性などは名誉なことでもなん

でもない。それより思想家と呼ばれる人には、思想の根底に必ず変化しない不変なものがあるからそれを見なければならぬ。彼はラスキのそれを次のように言っている。「それは人格的自我の実現を最高の価値とする立場である。・・・この個人の内的価値に対するアイディアリズムと政治権力に対するリアリズムとが一貫して彼（ラスキ）の判断基準となっている」⁽¹⁵⁾と。

ラスキは、若き時代をアメリカで過ごし、自国に帰ってから度も重なるアメリカ訪問と講演活動を続けた。そして、時代の変化や政治・社会状況の変化に即応しながら、多くの刺激的発言をした。それはあまりにも刺激的であったり、挑発的であったり、繰り返してであったり、時には矛盾を感じさせるものさえあった。しかし、丸山氏が言うような一貫したものが確かにある。ラスキの「アメリカ論」は彼の人生の後半に出版されていることからすると、この一貫したものを、彼のアメリカ論の全体像の中から探し求めなければならない。またそのことにより政治思想は恒久の命を持つものになると思われる。

(2) イギリス労働党員

ラスキの思想的基盤を特色付けるのものとして、彼が現役のまた積極的な労働党党員であったことである。ラスキは 1920 年帰国すると、フェビアン協会⁽¹⁶⁾と、その思想を政治の世界で実現を図る労働党に入ることになる。ロンドン・スクール・エコノミクスで教鞭をとる傍ら、このような政治活動にも参加し理論と実践をはかる彼の生き方は、多くの尊敬とそのまったく逆の評価を浴びることになる。しかし、日本はともかく、学者や大学教授が実際の政治にかかわり、また指導的理論家として政党に関係をする例は、欧米では奇異なことではない。現代では、労働党のブレア政権に、ロンドン大学の A. ギデンス⁽¹⁷⁾などが積極的に関わっている例がある。入党をした後のラスキは、早くから頭角を現し、1921～30 年までは成人協会の会長を、26 年には産業審判所の委員として、ゼネストの調停などにもあたった。党にあつては、執行委員を 1936～49 年の永きに渡り勤め、また、委員長を 1945 年～46 年の時期に経験するという幹部の一人であった。彼の労働党での立場は、一貫して左派に属していたと言ってよい。当時の労働党の中は、かなり幅広い人材を擁するもので、中には脱党後にまったく正反対の道を歩む者もあった。ラスキと同世代の O. モズリーなどはその典型であった。彼は 1929 年の第 2 次マクドナルドでは大臣職に就任するぐらいに頭角を現すが、意見の相違からやがて党から離れ、1931 年には新党を結成し、これは、32 年極右政治団体の「イギリス・ファシスト同盟」(British Union of Fascists) を結成しまつた全く違う政治の道を歩むことになる。⁽¹⁸⁾

同じくラスキもこの第 2 次マクドナルド内閣には失望するのであるが、脱党と言うような手段は少なくともとらなかった。そこにまたラスキの特色がある。この内閣は、労働党、保守党、自

由党の連合内閣であり、労働党こそは第一党であるが、他党に掣肘され労働党独自の色はもともと出しにくかった内閣である。P.V. スノーデン蔵相の緊縮財政政策に端を発したゴタゴタ劇は内閣解散という事態にまで発展し、1931年8月にはその結論が出たのであるが、結局マクドナルドは態度を翻し、内閣存続を決断することになる。これは保守党が政権をとることを求めている労働党員には納得できるものではなく、ただ政権維持だけを重視する日和見的マクドナルドに失望し脱党をする者も多かった。ラスキもその一人であったが、脱党はしなかった。この党自体が労働組合を母体としながらも、共産主義者に近い急進主義者から、自由党に近い考えの持ち主まで抱える連合戦線の党であったことから当然な分裂かもしれない。労働党の中で左派に属していた彼は、仲間が左派労働党として離れていくのに対し、この事件より前にすでに党のシンクタンクとされていた新フェビアン調査局に所属し、理論構築の作業に携わったのである。その下積みは、やがて党の執行委員長への道に繋がっていくのである。⁽¹⁹⁾

このような誠実な労働党党员であるラスキは、彼の考える「アメリカ論」自体の中にも様々な影を落としていることがわかる。それはアジテーターとしての影である。アメリカ滞在中での様々な出来事アジテーターとして物議をかもし出すものも数々あった。先に述べたように警察官ストライキに対するラスキの演説などは、まさにそれであった。晩年のシドニー・ヒルマン財団の後援による講演で、労働組合の存在の意義と労働者の党の必要性を説くラスキの姿はまさにアジテーターであった。そしてそのことは著作として残され、ラスキの「アメリカ論」を形成している。労働運動の質的向上、さらにそれを政治権力場で実現する労働党の役割は、もちろんイギリス本国での問題でもあるが、これに関してはイギリスより後進国であるアメリカにとってはさらに重要で、ラスキの関心度はきわめて高かったのである。

(3) 大学人と教育者

ラスキまた大学人という立場と教育者という立場を生涯離れることはなかった。労働党の中で頭角を現してくる30年代後半には、政治家としてのラスキを期待する声もあった。しかし、彼はそのことをきっぱりと断っている。あくまでも、研究を通して自由に物を言える立場を保持しておきたかったものと思われる。その逆の象牙の塔に籠り、研究と言う名目の下で社会に対し何も発言しない大学人を嫌った。そして、真理を探究することに消極的になり、党利党略の知恵にだけ精力を傾ける俗流の政治家を嫌った。このような考えは、ラスキをして当然に自分の立場を明確にせざるを得ない。政治家であり政治学者であるという一見困難そうな課題はラスキにとっては難しくなかった。正しく思ったことは、実践するという簡単なことであった。またそれが妥当性をなくすれば、反省をして新しい考えを実行するという態度である。

大学人として、ラスキが一番恐れることは、大学や学部が、特別な利益集団や世俗からの圧力に屈することである。このようなことに対して、大学が自らの自由を担保しえなくなった時、その使命は終わることになる。また、そのことにより、自己の学問上の考えを披瀝することを躊躇し、生活や安全が脅かされるような教師がいたとすれば、教師自身も自由でなくなり妥当な教師としての自らを放棄することになる。少なくとも、この当時のイギリスの大学ではこのよう汚点を持つ大学はないと言っている。かたや、アメリカの大学はどうか。ラスキは本国よりはるかに自由度が高く、大学の自治が確立しているかのように思われるアメリカの大学に失望するのである。イギリスの大学はその構成と伝統において自由を保証した。しかしアメリカの大学はその存続と堅実性を保持せんがために自由を犠牲にしていると言っている。イギリスの寛容さとアメリカの寛容さの違いである。自由と言う伝統の違いでもあるかもしれない。

教育者としての顔は、ラスキをして高い評価を得ている。それはアメリカの大学でもそうであったし、本国の大学でもそうであった。それにはラスキ自身の性格も多分に影響しているかもしれない。若者が好きだった。教えることが好きだった。ポケットマネーで貧しい学生を面倒みるほど無類に人が良かった。そして、何よりも彼の偉大な点は、接してくる全ての学生に個人として会い、その問題がどういうものであろうと平等に接した。そして教えるという教師の使命を決して放棄しなかった。1940年代は戦争の悪化でロンドンも安全な地でなくなり、彼は余儀なく疎開を強いられるが、その地でも学生を招待して議論をした。むしろ戦争の熱気はラスキをして学問や教育の方に集中させるものがあつたのである。

マーチンはラスキの全体像を次のように称している。「ラスキは学者で政治哲学者であつた。政治家であり雄弁家であり時事評論家であつた。何よりも彼は教師であり友人であつた。彼の人格のこれらすべての点は、社会の中の知性人の任務においての彼の考えに密接に結びついていた」⁽²⁰⁾と。

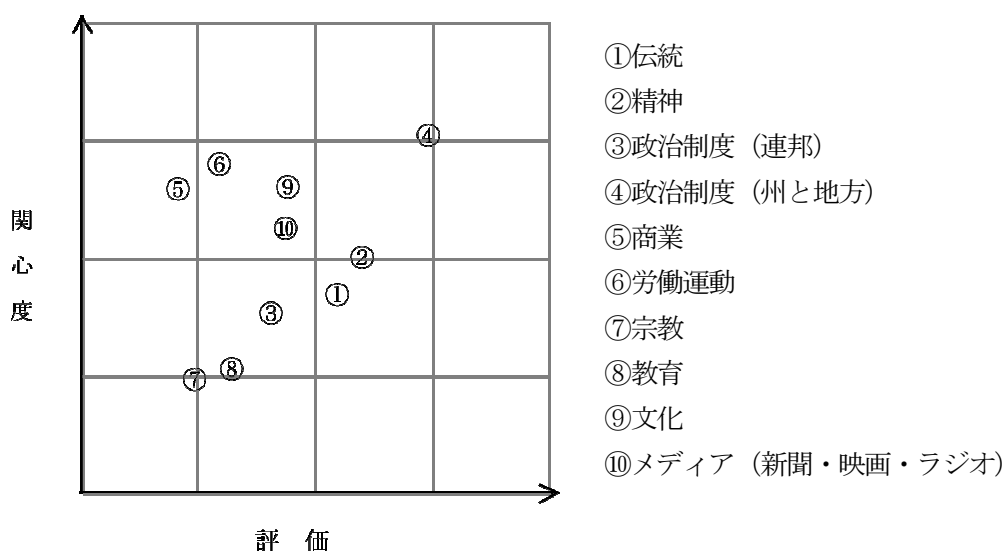
4. アメリカへの関心と評価

ラスキはアメリカ滞在中に「ハーパーズマガジン」(Harper's Magazine)、「アトランテックマンスリー」(Atlantic Monthly)、「ザネーション」(The Nation)、「ニューパブリック」(New Public)などに多くの記事を書いた。また大学での講演も数多くこなした。例えば、コロンビア大学、ワシントン大学、イエール大学、ニューヨーク大学、オレゴン大学などアメリカでも一流の

大学からのお呼びがかかり、むしろ喜んで出かけることが多かった。1946年のオハイオ州ケニヨン・カレッジでは上院議員の R. タフト⁽²¹⁾とは歴史の残る論戦を交わしているし、プリンストン大学 200 周年を記念する講演も有名である。このような講演での草稿は晩年になって著書となって残されている。有名な講演の一つであるノース・キャロライナ州チャペル・ヒルの講演は 1933 年『危機に立つ民主主義』⁽²²⁾として出版され、インディアナ州ブルーミントンの講演は 1940 年『アメリカの大統領制』⁽²³⁾として出版された。また、ラスキがアメリカ訪問の最後となった 1949 年の衣料労働組合主催のシドニー・ヒルマン財団主催の講演は、様々な不愉快な思いをさせられたが『現代社会における労働運動』⁽²⁴⁾として本になる。

ラスキは生涯 30 冊以上の書物を書くが、アメリカ論が比較的詳しく展開されているのが、上記の『アメリカの大統領制』、『現代社会における労働運動』などであり、最も詳しく論じられているのが亡くなる 2 年前の 1948 年に書かれた『アメリカ・デモクラシー』⁽²⁵⁾である。この著作は 800 ページにおよぶ大著でアメリカの①伝統 ②精神 ③政治制度（連邦） ④政治制度（州および地方） ⑤商業 ⑥労働運動 ⑦宗教 ⑧教育 ⑨文化 ⑩メディア（新聞・映画・ラジオ）などが論じられている。本稿はこの著作を中心にラスキのアメリカへの関心と評価をいくつか取り上げ検討してみたいと思う。

(1) 関心軸と評価軸における布置状況



①伝統について見ると関心はそれほど高くないが評価は高い。アメリカ人は自分の過去にはあまり興味を持たず、ただ前向きで、未来志向が強いと言っている。それはまたヨーロッパ人にな

い長所でもある。このことはアメリカ人の希望を限りなく高めるものであり、この希望がまたアメリカ人の生き生きとした快活さにつながっているといっている。「自分の過去などに興味を持たないのは、過去が自分の未来とはなんの関係もないにちがいないというふうに、硬く信じているからである。自分の受け継いだ伝統は、一つのダイナミックな文明の伝統であって、このような伝統の中では、例え昨日どのような風が吹こうが、今日は今日の風が吹くのだという確信が持てるのである。かれは自分の遺産の一部として、絶えず前進して行く権利があると考えている」⁽²⁶⁾とラスキは言う。しかし、このような良い評価と同時に個人主義が徹底し国家や政治に対して嫌疑心が強いことも指摘している。「アメリカの伝統は、本質的にみて、個人主義的な伝統であり、国家を見る眼は、ともすれば、疑惑や嫌疑の眼でありがちだ」⁽²⁷⁾と。ラスキにとってこれは高い評価ではない。また、「アメリカ人は親切でもあれば、慇懃でもあり、友誼に厚いことがあるが、その想像力の限界に至っては、アメリカ人を取り巻いている文明の規模の大きさを思えば、予想外に狭いといわなければならない。私は、この態度が、實際家を思索人より優位に見ようとする態度と、関係をもっているというふうに見ようとするのを、まるで奇抜な考えだとは思わない」⁽²⁸⁾というようなことからラスキの低めの評価が窺がえるのである。

②精神について見るとヨーロッパ人と比較しながら、その特徴を述べている。「アメリカ人にとっては、いつも一つのフロンティアの先にまた次のフロンティアがあるということだったし、アメリカ人の驚くべき活力こそ大陸征服の秘訣だったからである」⁽²⁹⁾。このようにアメリカ人のフロンティア精神を高く買い、またその驚くべき活力に賞賛している。そして次の引用からもわかるようにアメリカ精神、つまりそのプラグマチック性や自力性に高い評価をしているのである。

「元来アメリカ精神は、絶えず変化しつつある環境の中で働きをするものだから、アメリカ精神は、どうしても革新し適応して行く力を非常に重く見る。アメリカ精神にも過去に対する尊崇の念はある。合衆国ほど、過去を宗教的に記念する国は世界にも類を見ない。しかし、一方にこのような尊崇があっても、他方、この尊崇は各世代が自分自身について実験を行う権利を持っている点と全く矛盾しないばかりか、各個人が自分で運命と売買の契約を結ぶ権利を持っているという点とも矛盾しない。アメリカが冒険者の国だったからこそ、アメリカ精神は、自力本願ということに高い価値をおいてきた」⁽³⁰⁾と。

③政治制度（連邦）に関しては、ラスキは次のような視点に立っている。大統領制は、今日その権能としてリーダーシップやイニシャティブが発揮され、過去に比べ良くなって来ているが、その他の制度で、特に下院の問題や官僚の問題を指摘し悪い評価をくだしている。「下院は、連邦制度としては、いつも一番見栄えのしないものであったが、今もってこの有難くない特徴を帯び

ている。連邦の行政事務は、その半永久的な面に立って見れば、政策立案の素材を供する団体というよりも、どちらかと言えば、大体二流の行政官の集まりで、大して意欲も感じずに政策を公式化してはこれを実施する団体に過ぎない⁽³¹⁾と手厳しく指摘している。彼は当時の下院の活動実体を見てその問題点をいくつか指摘している。まずは彼らが地域の永久在住者からの出身であることにより有能な人物である保障はないこと。同時に彼らが自らの地位保全に全精力を傾けている実体がある。さらに彼らは国民の声に耳をそばだてるというようなことはめったにないと言っている。そして、アメリカでは世界で一番発展しているといわれる圧力団体にかかなりの部分屈しているという指摘である。これに対しラスキは上院を評価している。「連邦政府の立法面に関して言えば、重要な役割を果たしているのは実際上院であり、アメリカの公衆の注意が注がれてきたのも上院である。・・・上院が大統領の行おうとする、行政、政治、司法、外交上の主な任命をすべて確認しなければならないから、上院は、いきおい、公衆の関心をひかざるをえぬ議院なる傾向がある」⁽³²⁾と。

④政治制度（州と地方）についてはラスキかなり関心度も高く評価も高い。主権を完全に持った州ではなく、必ずしも地方民主主義が貫徹した制度ではないが、アメリカの州はイギリス州やフランス省にない中央に頼らないという独自性があると言う。知事や立法機関があり、司法制度があり、教育制度がある。地方の政治が育つということは民主主義が育つということであり、アメリカはヨーロッパの国に比較してその先鞭をつけている。このような点が政治的多元主義者ラスキの評価の視点であり、その関心度が高いこともうなずけるところである。そして、ラスキはアメリカの地方自治への将来の期待も次のように述べている。「州はまた将来思い通りにその都市地域と農村地域に自治権を与えたり取り上げたりすることになるだろう。これも将来のことだが、州にはまた義勇軍と州警察が設けられることになるだろう。大半の州には、イニシャティブとレファレンダム、時によってはリコール制までも用いて、民主主権という観念に現実性を与えようとする試みがこれからは見られることであろう」⁽³³⁾と。このような政治制度についての関心の他に彼は、地方の風土・精神にまで関心を及ぼし、むしろその地方性を草の根的で自然かつ情緒的のものとしてむしろ評価しているのである。「州というものがあるために、その市民の大半は否定することのできない地方根性を植えつけられているけれども、しかしその地方根性のうちに、愛嬌というものに近いものをもってない州はない。・・・独立戦争の思い出を褒め称えている演説を読めば、夫婦ともども集まってこれに耳を傾けた農民や店員や労働者が、自分たちもやはり、人間性の尊厳の度を増し加える一つの偉大なる伝説を、それぞれ分かち持っているのだと感じていたことを疑うわけにはいかない」⁽³⁴⁾と。

⑤商業に関しては、アメリカは文明史上でもっとも進んだ国として位置づけられ、それに合わせて莫大な富を蓄えた実業家が数多く出ている。明らかにここでは膨大な資源がアメリカ人の自由に委ねられているということであり、その開発の機会があったからである。アメリカのビジネスマンの異常な威信こそは、ピューリタンの労働に対する福音で言う、成功と恩寵の同時実現に由来するもので、宗教とも密接に関係を持つものであった。「アメリカのビジネスマンは他に見られないほど非凡な性質を持っている。その活気には異常なものがある。アメリカのビジネスマンは朝から晩まで自分のビジネスに行き自分のビジネスに献身する。ここにはちょうど中世の聖人が自分の宗教にささげた献身振りを思わせるものがある」⁽³⁵⁾と。しかし、ラスキはこの商業主義にむしろ社会主義的立場から厳しい評価を下している。しかもこの商業主義は政治と結びつき腐敗の温床になるというより、ビジネスに携わる人間が、自由放任こそ社会的行動の正しい原則だと決め込んだ時悲劇が起こると言っている。「私的行動を公的行動より優位なものとみて、これを強調することは不正であるばかりでなく、結局ビジネスマンに自分たちは政治に何の役割を演ずべきではないと思わせ、第2に政府が消極的であればあるほどそれだけ良いものだと思わせる惨めな結果になる。このような態度の結果は、結局政治機関とビジネスの癒着ということになり、これがアメリカ生活の質全体を腐敗させることになる」⁽³⁶⁾と言っている。そしてラスキは極端な大金持ちと多くの貧しき人々を生み出すアメリカの商業主義に疑問を呈している。そして、このことが民主主義の根幹を揺るがす重要問題だとしているのである。「アメリカのビジネスが、いまだに純粋な知的誠実をもって検討してみなくてはならない真の論点は何かといえば、南北戦争以来合衆国に起こったような、膨大な富の集中が、民主的な政治制度の維持と真に両立しうるかどうか疑問だからである」⁽³⁷⁾と。

⑥労働運動について見ると非常に高い関心をもつと同時に評価は低いことがわかる。まずアメリカの労働運動の特色は、政党と組みすることなく独立した政治行動をとり、資本主義社会を前提とした国家理論をそのままにして運動していることによる弱点があると指摘する。さらにこの幻想は、アメリカ政府が国家権力の代理として、社会内部の対立に中立的な仲裁力を持ち合わせているかのように錯覚しているところに問題があると指摘している。アメリカはもちろん政治的民主主義の国であるから、労働者や労働組合が自らの要求を実現することについては独裁的国家よりはるかに高いが、しかし限界があることも事実である。それを理解することがアメリカの労働者にとって大事だと言っている。不運にも国家権力の問題に労働者階級が実用主義から接近してしまう欠陥は、1929年以降の経済的危機が戦争という国際的危機に変化したためにうやむやになってしまった。これは別の見方をすれば、再軍備のために労働者に高賃金を払うことにより根

本的な問題の解決を覆い隠してしまうことになったということである。このような悲劇を避けるためには、労働組合を基礎とする政党をつくることであり、労働運動がその役割を担わなければならないと言っている。「労働組合は彼らの熱望を彼ら自身の独立の政党を通して表現すべきであり、アメリカにおける進歩主義の中心を作ってその推進力をすべての周辺に結集すべきだと考える。私はこの政党がいかに作られ、正確にいかに表現する目的を求めるかを考えない。時代精神の中で、もっとも関係あるものをアメリカの舞台から引き出すのが、アメリカの労働党であると信じる」⁽³⁸⁾と。

このような見解を見るとラスキは明確な社会主義者として発言をし、アメリカの例外主義説などは主張するまでもなかった。これに対する当然の批判がアメリカ国内で起こる。ラスキを本来自由主義者と見て、彼がアメリカの事情を単に誤解しているだけだと好意的に見る友人もたくさんいた。しかし、彼はそれらの批評に対して自らの信念を変えることはなかった。むしろその信念を強めたといってもよいかもしれない。それはアメリカ主義と言われるものが今やヨーロッパ主義と言われるものと重なってしまう時代が来ている。ヨーロッパが古い文明から逃れようと苦しんできたことが、今アメリカに当てはまるのだと言っている。余裕の時はなく、アメリカの民主主義が救いの手の差し出る前につまずくかもしれないので、労働党の組織化とそれに伴う労働運動の質の向上が急がなければならないと言っている。そして、ラスキの思いのたけはアメリカに対する期待と変革へのメッセージである。それは彼のアメリカに対する熱い思いの裏づけのようにも取れる。アメリカはいまや世界有数の強大国になった。それは一重に社会的災厄がアメリカ人にかかってくれば、その危険に他のすべての国民を引きずり込むということである。したがって今後半世紀の間の歴史はアメリカが作ることになるかもしれない。アメリカには重大な責任があるというのだ。

⑦宗教について見ると、ラスキの独特の視点が窺える。彼はユダヤ教徒の家に生まれ、彼自身も熱心なユダヤ教徒であったから、宗教に関しては崇高な考えを持っていたし、また日常生活からしても縁遠いものではなかった。彼によれば、宗教は悩んで耐えることのできない苦しみのため、心いためる人々と関係を持ち、欲望や気まぐれを克服することができるところまで自分を高めてくれる内心の激しい本能の中にこそ存在する崇高な精神なのである。したがって、宗教はこの世とは妥協することはできないものなのである。しかし、アメリカの宗教について次のように述べている。「アメリカの諸教会にあっては、関心の中心が、教会の教義的諸問題から、すでに何をなすべきかという行動の問題へと移ってしまったと行って過言でない。・・・もはや教会が彼らの生き方を決定してくれるものとは考えていない。・・・彼らが教会の機能として考えていること

は、常套化した日常生活の世俗性への挑戦というよりは、むしろ日常生活の苛烈さに対する単なる代償にすぎない。仮に利欲社会の諸原理に対して、戦いを挑むような聖職者は、しばらくもその信徒を維持することは困難であろう」⁽³⁹⁾と。これは宗教が世俗と妥協したことであり、世俗に対して価値の標準を与えるのではなく、価値の標準を世俗から与えられたことになる。このことは利欲社会を教会が自ら後押しをするものであり、批判するものでは決してないのである。それどころか教会は巨大組織化してそこでの財政は一大事業に似たものになっている。それはまた資本主義社会の理念を正当化することにも助力することになるし、社会的矛盾を促進することへも貢献することになるとしている。ラスキは宗教そのものの存在とその精神を否定はしない。しかし、完全に世俗と妥協し、利欲社会や資本主義社会と妥協してしまったアメリカの宗教、特にキリスト教には厳しい評価を下している。

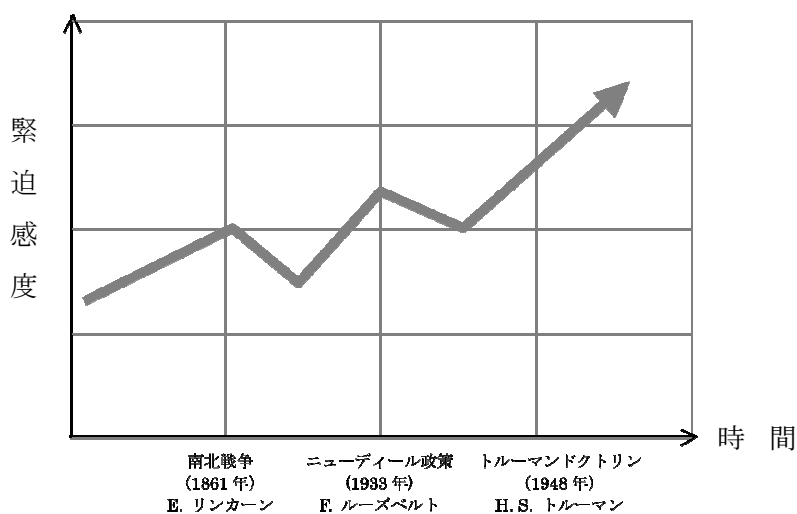
⑧教育については、アメリカの生活様式、つまり、事業の社会的価値に対応する生活様式に依拠しているとし、その評価は厳しいものがある。教育の構造は、職業上の成功を重視しているし、事業文明の発展の必要を満たすよう組織づけられており、富を高めることに貢献するような人々を対象にする教育だとしている。大学の教育とて、この呪縛から逃れられるものではなく、むしろ事業文明の進化に貢献しているとしている。ラスキは特に大学教育では学問の自由は、大学の命であり魂であると考えている。しかし、民主主義を標榜し、自由を社会の基本原則としてきたアメリカがその不都合な問題に直面した時にいかに脆弱であるかをアメリカ滞在を通して実感している。このような実体験を通してラスキのアメリカの教育は、その表と裏、理想と現実を見抜き厳しい評価を下しているものと思われる。

⑨文化については比較的関心度は高く、しかし評価は低いように思われる。関心度の高さは、ヨーロッパにないアメリカの快活な文化の存在である。特に古き良き時代に象徴されるアメリカ文化は、資本主義の矛盾があらわれる 1929 年までアメリカの誇りであった。文化はその時代精神の象徴でもあるから当然健全な時代には健全な文化が凌駕する。しかし、時代が変わり不安な時代が訪れればたちまち文化も変化してしまう。そこにアメリカ文化の弱点が存在するとしている。資本主義、利欲社会に侵食された文化はその犠牲であり、抜け殻でしかなくなる。たとえ幸福の追求でも、美の追求でも利潤制度の要求の犠牲にはいとも簡単になってしまうのである。アメリカ文化とてその例外ではなく、それはラスキにとっては 1929 年以降評価の低いものになってしまったのである。

⑩マスメディア（新聞・ラジオ・映画）については、文化に含めることもできるが、ラスキが別立てで論じていることから関心も評価もそれほど低くはないように思われる。アメリカ人の

情報好きについて次のように述べている。「それに1840年までに1ペニー新聞が誕生したことから、これが地方根性の打破に役立つばかりでなく、そのために、あらゆるものに関するアメリカ人の情報好きが生まれはじめ、これが、今日ではアメリカの新聞記者のニュース獲得の腕を、その規模の性格から見て、世界のどの国民の習慣とも一寸を隔するものとなった。飢えたようにニュースを欲しがるといふことは、アメリカ精神の一つの特色で、これには依然として飽くことを知らぬところがある」⁽⁴⁰⁾と。いずれにしろこれらの媒体は大企業の一枝であり、その経営戦略からは独立はできないものだとしている。様々なメディアの目的は真理を通じることではなく、利潤を作ることだと彼は断言している。真理の全部ではなくその一部を流すことはあっても、利潤と対立する内容は決して流さないものだと言っている。それはヨーロッパの国々よりはるかに自由を標榜し、言論の自由を社会生活の根本原理に据えているアメリカ社会であっても、ラスキは現実の問題としてその限界をアメリカ社会の中に実感したのである。

(2) 政治に対する緊迫感度軸と時間軸



ラスキはアメリカの歴史の中で、図のように三つのエポックをあげている。それは大きな政治の変化が起きるときであり、政治の緊迫感度が高まり、そのダイナミズムが現れる時である。またラスキは合衆国の政治生命が大統領に多分に左右され、そこに歴史が作られることを見ている。したがって、合衆国で起こった出来事や政策、さらにその時の大統領を重ね合わせた座標軸と、緊迫感度（ダイナミズム）の座標軸を検討しながら彼のアメリカ論に言及してみよう。

アメリカでは独立以来南北戦争に至るまでは、社会変革の場で、国家権力をその遂行の手段と

して使うということが比較的なく、むしろこれを手段として使うことに敵意をもたれた歴史がある。また J. ワシントン大統領以降の大統領も E. リンカーンの出現までそれほど傑出した人物は出ていないと言っている。いずれにしろこれらの大統領には消極的態度が共通しているとも言っている。建国以来アメリカの国情は 19 世紀半ばになりその矛盾が現れてくる。そしてそれは一つの内戦へと発展するのである。北部は早くから資本主義が発達し西部の独立自営農民層を基盤とした商業的農業と結びつき交通・通信網の発達していた。北部と西部の二大地域に地域間分業に支えられて資本主義的生産圏が出現する。一方南部は、黒人奴隷制度を基盤とした前近代的社会があり、まったく様相をことにする社会が出現していたのである。北の合衆国と南の南部連合はこの奴隷制度を焦点に対立を激化し、1861 年 4 月、南軍が北軍のサムスター要塞を攻撃することから、内戦の火蓋が切られた。一進一退の後、北軍の優勢が勝利へと結びつく。リンカーンは 63 年 1 月には「奴隷解放宣言」を、4 月には激戦地ゲテスバークにて民主主義の理想を掲げた「戦没者慰霊演説」を行う。4 年間に渡る内戦であったが、アメリカの歴史を変える大きな出来事であったのである。つまり、アメリカの資本主義が、黒人奴隷制度を廃止し、南部を包括した巨大な国内市場を作り上げ、これをさらに発展させることになるのである。「アメリカ資本主義は、南北戦争以来、近代世界がかつて見たことのないほどの断固とした剥奪的資本主義傾向によって独占的なものとなった。気まぐれな関税もいくつかあった。移住に対する障壁で打ち立てられるものはほとんど打ち立てられた。気の毒になるほど弱々しい労働組合もあった。・・・農民と投資銀行業者との比較的力を仮定するということになれば、勝利が銀行業者に手中にあるのは、最初からわかりきった話である」⁽⁴¹⁾と。ラスキは時代の緊迫感とリンカーンの所業を高く評価している。

そして次のエッポックは 1933 年 F. ルーズベルト大統領の時代にやってくる。彼の出現まではアメリカの民主制度は解体していたと言っている。それは資本主義が発達につれその矛盾を露呈してきたことであり、それに対して、政府は何も打つ手を考えず放置していたことの付けが回ってきたということでもある。1929 年～33 年までの H. フーバー大統領のモラトリアムの失敗である。彼は次のように言っている。「世界は、南北戦争の終わりから 1929 年の大恐慌までの合衆国に、民主的制度の解体とでも呼ぶほか呼びようがないものを目撃した。形式上の政府は、決して実際上の政府ではなかった。政党は数あったが、真に原理の違いを示したものは一つもなかった。一方では、ボスとその政党機関が、他方ではワシントンのロビイストと州資本家、今までになく緊密に、国民の経済生活を支配する人々と結びつくに至った」⁽⁴²⁾と。ルーズベルトは、世界恐慌を克服するための「ニューディール政策」を発表した。それは今までの古典主義的な自由経済政策を一転させ、政府がある程度経済に介入する社会民主主義的な政策への転換である。そし

てこれは、イギリスの経済学者 J.M.ケインズの理論を取り入れたものである。矢継ぎ早に議会で雇用政策や景気回復政策を提出しその対策に努めることになる。次のようなものが 100 日間で実現したと言われる。TVA (テネシー川流域開発公社による公共事業)、CCC (民間資源保存局による大規模雇用政策)、AAA (農業調整法による生産の調整策)、緊急銀行救済法、ワグナー法 (労働者の権利拡大を目論む) などがある。このような社会民主主義的な取り組みは、また大いなる実験として、その国だけでなく世界に影響を与えるものである。世界が動くことになる。このダイナミズムをラスキには大いなる緊迫感として実感できた。これをもって大統領のイニシャティブや積極的権能国家を、彼は今までにない大統領や政府として高く評価するのである。そして、それは世論が認めたことなのであるとも言っている。「C. クーリッジや H. フーバーに消極主義に対する敵意は、大統領という職務をもって、性格として消極的なものでなく積極的なもの出なければならぬと言う認識に基づいて築きあげられたものであったという点に留意することが肝要である。この認識は、ニューディールの第一期に完全に表現されるに至ったが、それは取りも直さず、大統領のイニシャティブこそが、連邦機構というアーチ全体の頂上におかれる要石だということ、ようやく世論が容認したことに他ならない」⁽⁴³⁾と。

ラスキにとって晩年になる時期にもう一つのエポックが来る。それは 1945 年～1953 年まで在職する H.S. トルーマンの時代にやってくる。彼は第二次世界大戦の終了から、朝鮮戦争の勃発と休戦という激動の中で生きる。その中で、注目されるのが 1947 年の「トルーマン・ドクトリン」である。これは、少数民族や、外圧により虐げられている人々を自由主義的立場から支援を目的とする政策であったが、実際は共産主義封じ込め政策とも言われ、アメリカのライバル国になりつつあったソ連を意識したものであった。資本主義体制と共産主義体制を二分するいわゆる「冷戦」はここからスタートをすと言ってもよい。そして、これがアメリカにおける共産主義者を見つけ出そうとする「赤狩り」⁽⁴⁴⁾へと発展するのである。ラスキにとってはこのドクトリンは新しい時代にむけて緊張感をつくりだす重大な意味を持つものだったのである。国内外に膨張し拡大するアメリカの権力にラスキは危険性を限りなく感じ、第三次世界大戦の勃発の可能性を論じている。ラスキはアメリカが戦争について、如何に考えているのか、それは皮肉にも聞こえる論調で次のように述べている。「この戦争 (第二次大戦) は、アメリカ人の圧倒的多数にとって、歴史に名だたるアメリカの伝統に対する信念を新たにさせるものではなかった。彼らの気分は、ひとえに敵を打倒せねばならぬという確信の気分でこそあったが、その敵を打倒した後の結果については、疑惑と躊躇に満ちた気分であった。戦争を指図し計画した人々の間にも、自分たちは、今、アメリカの伝統を革新するための十字軍に加わっているのだという信念がほとんど見られな

かった。それどころか、むしろ、アメリカの伝統が革新されるべきものだという確信を、彼らが果たして懐いているかどうか、疑わしいことさえ若干あった。危機に際してはほとんどいつもそうであるように、彼らは、どうしても天才としか思えぬような規範の即席の能力を示した。いつものように、彼らは、戦いを勝ち抜かんがために戦った。彼らは敵を完璧なまでに打ち破るということ以外の目的で、戦争の苦しみに加わったことはなかった。しかし、彼らは、自分が今戦っているのは何のためかということについて、議論を尽くしたことはなかった。このような戦争目的は、どうやったらつかむことができるのかということについても、議論を尽くしたことはなかった。アメリカの夢がいかに素晴らしいか、それについて突然目が覚めるような思いがしたということとはなかった」(45)と。

アメリカは民主主義を守ることができるのか。社会は後戻りをしないのか。二大陣営の戦争は回避できるのか。一つの政策がこれほどまでに世界に不安定材料を与えることが以前にあっただろうか。ソ連をも射程に入れながら新しい政治の仕組みを模索するラスキにとっては、その只中で、最も緊迫感を高めるものであったのである。それは冷戦という形で、世界の各地で勃発するが、1950年に朝鮮半島での戦争が起こった時ラスキはもうこの世には存在していなかったのである。

5. むすびにかえて

外国人が書いたアメリカ論は数多くある。M.J. クレヴクール、A. トクヴィル、J. ブライス、D. ブロガン、A. ジークフリート、そして比較的新しくは、M. クローチェ、J. ボードリヤールなどが一流としてあげられる。ラスキのそれもこの中に加えることができるであろう。そして、政治学の視点に絞れば、トクヴィルとブライスは避けて通れない人物である。政治学の中では、この三人のアメリカ民主主義論は、現在古典としてその金字塔となり得ている。しかし、古典の意味は単に古めかしくなったものでなく、当然現代へのアクチュアリティを内包するものであり、あらためてこれらの古典の書といわれるものの意義を感じる所以がある。この二人のアメリカ論を少しく見ながら、ラスキのアメリカ論の特色を考察してみたい。

トクヴィル(1805～59年)は貴族の出であり、若くして法律を学びその後すぐにヴェルサイユ裁判所勤務することになる。休暇をとってアメリカに友人と視察に出かけ、約10ヶ月後に帰国し名著となった *De la democratie en Amerique* 1835. [井伊玄太郎訳 『アメリカの民主政治』

上 中 下 講談社 1987年] 書き上げるのである。1839年より代議士として政治生活には入り、その後 O.バロー内閣の外相になるが、1851年クーデターにて更迭され、その後研究生活に入り生涯を過ごすことになる。この著作は政治学の古典的名著であり、昨今生誕 200 年を経過し注目を集めているところだが、研究もすでに国際化しており彼の思想の意義や評価が脈々と議論され続けている。⁽⁴⁶⁾他方、ブライス(1838～1922年)は「地方自治は民主主義の最良の学校である」⁽⁴⁷⁾という名台詞とともに、初歩の政治学のテキストには必ず登場する人物である。法律家、政治家、歴史家などの多彩な顔をもちながらオックスフォード大学にてローマ法の教授を務め、この期間に代表作の *The American Commonwealth* 1888. [名原廣三郎訳 『アメリカ国家論』上・下巻 橋書店 1944年] を書く。彼はまた 1880～1907年まで自由党下院議員として、W.E. グラッドストーン内閣、ローズベリー伯爵内閣、H. キャンベル・バナマン内閣で閣僚を務める。1907～13年駐米大使を務め、退職後日本、オーストラリアなどの歴訪もある。

前者のアメリカ論は、アメリカの民主政治の検討をし、それをフランスの政治に役立つ教訓を引き出すべく書かれたもので、啓蒙の書であることには間違いない。1820年代の当時のフランスの自由主義の交流はやがて反動勢力を生み出し、七月革命へと向かった。彼にとってはフランスは民主主義の進行がなぜ順調に進まないのか。なぜ革命といわれる血が流れるのか。それとはまったく逆のアメリカの民主主義の英知を探り、自国民に突きつけたかったのである。デモクラシーの啓蒙こそが、トクヴィルの政治的实践であり、それは書物であってもまた実際の政治家としての活動を通じて一貫する姿勢であった。トクヴィルのアメリカ論には二つのキーワードがある。一つは「平等」ということで、その表面上の高等価値の意味に加え、寡頭権力の発現、さらに虚無主義に発展する可能性すら示唆するものである。もう一つは「結社」という概念であるが、権力からの解放という正の意味を持つと同時に、これはまた無政府主義や無秩序を意味するものになる。したがって、これらが正しく出現する社会を描かなければならなくなる。彼はそれを「結合した社会」というイデアルチップスの中に求め、フランスの現実の政治のうえに演繹したのである。それは、もう少し具体的に描けば、王制の権力の存在と、同時に貴族制の英知と理性の存在、民主制として自由と平等の存在が実現している社会である。

後者ブライスの「アメリカ論」は 1867年のイギリスの第二次選挙法改正に伴い出現する社会状況、つまり多くの民衆が関わる政治体制の出現による驚喜と混乱に為政者はどのように対処したらよいかというまさに実利的モチーフの下に書かれたものである。イギリスとの比較をしながら、アメリカの現実を実証的解明し、いわゆる民衆政のあり方を問うたものである。ブライスはこの書により、トクヴィルのそれから 50 年以上後に出現するのであるが、それ以来のアメリカ

カ民主主義論の旗手となるのである。

ラスキはこの両者に対して次のような見解を述べている。「わたくしは、イギリス帝国と合衆国との交渉史の上でブライス卿の『アメリカ共和国』の著作こそ真の大事件だと思う。それは、アメリカの偉大さを正しい釣り合いのもとに認めた、イギリス人による最初の書物だったからである。……しかもたとえ半世紀前にトクヴィルがアメリカの意義を、ブライスよりさらに突っ込んで見破っていたとしても、上のことはかつ真実である。それは、トクヴィルの著作の意図が、フランス文明にあったからであり、アメリカ合衆国は中心問題でなく、むしろ一つの例証として、書中に忍び込んだものに過ぎなかったからである」⁽⁴⁸⁾と。また、「アメリカを、同情をこめて、アメリカそのものために、直接研究したのは、ブライスをもって嚆矢とするといっても間違いあるまいと思う。トクヴィルも偉大な書物を著したとはいえ、彼は合衆国を合衆国そのものの条件で理解しようとしたというより、むしろアメリカのいろいろな条件にフランスの未来の分析手段を発見しようとしたにとどまった」⁽⁴⁹⁾と言ってブリスを評価している。またトクヴィルの研究者の松本礼二氏のトクヴィルとブライスに対する見解も紹介しておこう。彼は次のように述べている。「ジェームス・ブリスの『アメリカン・コモウェルス』が刊行されたことは、『アメリカの民主主義』の著者としてのトクヴィルをも時代の関心から遠ざける結果を招いた。アメリカについてアメリカ人以上に通暁していると自負するブリスは、事実を無視して原理を求める過度の演繹、アメリカ文明の祖型としてのイギリス中産階級精神についての無知、アメリカを論じながらフランスを意識する視座の交差、の三点にトクヴィルの誤謬の因を求め、より具体的事実面に即し、アメリカ社会のその後の変化をもおりこんだ新たな総合としてのこの大著を著した」⁽⁵⁰⁾と。

トクヴィル、ブライス、ラスキの「アメリカ論」について見ると、共通しているところと、そうでないところが明確にある。三者は自国との比較において、自らの「アメリカ論」を仕上げているが、前二者はその「アメリカ論」をまた自国にフィードバックし、そこに啓蒙的要素を盛りこむのであるが、ラスキにはそれがない。むしろ、イギリスの視点からアメリカを分析し鋭い批評している。一貫して社会民主主義者としてのイデオロギイ的視点であるため、限界と賛否があるが、逆にその視点により、アメリカ政治・社会の欠点の指摘の正鵠を得ている部分もある。⁽⁵¹⁾ラスキはアメリカにまったく幻滅を感じているわけでもない。むしろ期待の方が大きいかもしれない。彼には、少なくとも、イギリスの政治の方がはるかに洗練され、優れた政治体制としての自負があったのかもしれない。また、実際に労働党員として政治に携わりながら、研究とそれによる発言を誠実に実行しているラスキ自信の自負もあったのかもしれない。アメリカでの研究生

活にはじまり、様々な著名人との交流があった彼は、アメリカが好きであった。アメリカから学ぶものも多分にあった。戦争という悲劇がなければもっとアメリカを往復したであろう。しかし、人間の持つ寿命と言う宿命と、その人のもつイデオロギーや思想は、彼の欲望に必ずしも沿うものでなかった。アメリカに対する期待と失望のもとに 1949 年 4 月を最後の訪問を終えるのであるが、彼は再びアメリカを訪れる日を待っていたに違いない。できればかつて出会った熱烈な歓迎の中で。

注

- (1) 山口二郎著 『ブレア時代のイギリス』 岩波書店 2005 年
- (2) T. スコッチボル著 河田潤一訳 『失われた民主主義』 慶応義塾出版会 2007 年
- (3) H. ジン著 鳥見真生訳 『学校では教えてくれない本当のアメリカの歴史』 あすなろ書房 2009 年、E. ロウ著 『本当は恐ろしいアメリカの真実』 講談社 2009 年
- (4) L. デュギー (1859～1929 年) はフランスの法学者でボルドー大学教授を勤める。Les Transformations du Droit Public, 1913. を著す。ここでは国家主権を否定することで、国家の公共奉仕の強調、地方分権や職能代表の理論が主張されている。ラスキは早くからデュギーに関心を持ちアメリカ在住中に妻フリーダ夫人と翻訳にかかり 1921 年に *Low in the Modern State* として出版されている。(和田英夫著 『ダイシーとデュギー』 勁草書房 1994 年 102 頁)
- (5) これは Holmes-Laski letters: the correspondence of Mr. Justice Holmes and Harold J. Laski, 1916-1935. [M.D.ハウ編 鶴飼信成訳 『ホームズーラスキ往復書簡集』 岩波書店 1981 年] に詳しい。
- (6) K. Martin, Harold Laski, Victor Gollancz 1953. p.33. [山田文雄訳 『ハロルド ラスキ』 社会思想研究会 1955 年 39 頁]
- (7) *ibid.*, p.38. 邦訳書 46～47 頁
- (8) これは、*Studies in the Problem of Sovereignty*, Yale Univ. Press, 1917. *Authority in the Modern State*, Yale Univ. Press, 1919. *The Foundation of Sovereignty and Other Essay*, Harcourt Brace and Co., 1921. をさす。これについての研究は拙稿の「H.J.ラスキの政治思想—初期作品の主権三部作を中心に—」『埼玉女子短期大学紀要』 第 3 号 1992 年に詳しい。
- (9) 水谷三公著 『ラスキとその仲間—赤い 30 年代の知識人—』 中央公論社 1994 年 271 頁
- (10) H.J. Laski, *A Grammar of Politics*, George Allen & Unwin Ltd., [日高明三、横越英一訳 『政治学大綱』 上・下巻 法政大学出版会 1952 年]
- (11) R.M. マッキーヴァー (1882～1970 年) はスコットランドに生まれ、オックスフォード大学を出て、トロント大学、コロンビア大学で教鞭をとる。ラスキと同世代でカナダでは一足先について教鞭についていた。1934 年にはすでにアメリカに帰化している。社会をコミュニティー (基礎

社会) とアソシエーション (機能社会) に分け、権力概念や民主主義概念の再構築による多元的国家論を展開した。ラスキは多分に彼の影響を受ける。代表的な著作に *The Web of Government*, MacMillan, 1947. [秋永肇訳 『政府論』 勁草書房 1954 年] がある。

- (12) 拙稿 前掲書 40 頁に詳しい。
- (13) C. Howkins, 'H.J. Laski: A Preliminary Analysis', *Political Science Quarterly*, vol. LXV, No.3, September 1950.
- (14) H.A. Dean, *Political Ideas of H.J. Laski*, Columbia Univ. Press, 1954. [野村博訳 『ハロルドラスキの政治思想』 法律文化社 1977 年]
- (15) 丸山真男 「ラスキのロシア革命とその推移」 『現代政治の思想と行動』 未来社 1971 年 243 頁
- (16) この協会のルーツは 17 世紀までさかのぼる。T. ダビットソンの提唱する「新生活の仲間」から始まり、19 世紀後半 G.B. ショウや S. ウェップらによりこの名前になったのであるが、この名前の由来は、ローマの将軍フェビウス (Fabius Cunctator) からきている。それは忍耐と深慮により改革を進めていったフェビウスに因んだものである。これらのグループは議会制民主主義を通じ漸進的改革をめざすもので、やがてイギリス労働党に引き継がれていく。
- (17) A. ギデンス (1938~) は、ロンドン大学の名誉教授で、構造化理論、再帰的近代化論を唱え、また、ブレア政権のブレインとして「第三の道」の提唱者でもある。著書に以下のものがある。*The Third Way: the Renewal of Social Democracy*, Polity Press, 1996. [佐和隆光訳 『第三の道—効率と公正の新たな同盟』 日本経済新聞社 1999 年] *The Third Way and its Critics*, Polity Press, 2000. [今枝法之・千川剛史訳 『第三の道とその批判』 晃洋書房 2003 年] *Over to you, Mr. Brown: How Labour Can Win Again*, Polity Press, 2007.
- (18) 拙稿 「戦後イギリスのネオ・ファシスト団体の思想と運動—モズレー卿の同盟運動を中心に—」 『埼玉女子短期大学紀要』 第 9 号 1998 年を参照。
- (19) 関 善彦著 『イギリス労働党史』 社会思想社 1969 年 148~176 頁
- (20) Martin, p.257. 邦訳書 361 頁
- (21) R. タフト (1889~1953 年) はオハイオ州出身のアメリカ上院議員で、保守派の上院政策委員会議長として国内政策を指導した。労働組合の活動を制限したタフト・ハートレー法は彼によれ作られた。ラスキとは当然対立する立場にあった。
- (22) H.J. Laski, *Democracy in Crisis*, George Allen & Unwin Ltd., 1933. [岡田良夫訳 『危機に立つ民主主義』 ミネルヴァ書房 1968 年]
- (23) H.J. Laski, *The American Presidency*, Grosset & Dunlap, 1940. [池田謙一郎訳 『アメリカの大統領制』 日本ブック・クラブ 1948 年]
- (24) H.J. Laski, *Trade Unions in The New Society*, George Allen & Unwin Ltd., 1950. [隅谷三喜男 藤田若雄訳 『現代社会における労働運動』 みすず書房 1951 年]

- (25) H.J. Laski, *The American Democracy*, George Allen & Unwin Ltd., 1949. [東宮 隆訳 『アメリカ・デモクラシー』 I II巻 みすず書房 1952年]
- (26) *ibid.*, p. 5. 邦訳書 I巻 15頁
- (27) *ibid.*, p. 7. 邦訳書 I巻 18頁
- (28) *ibid.*, p.15. 邦訳書 I巻 34頁
- (29) *ibid.*, p.39. 邦訳書 I巻 80頁
- (30) *ibid.*, p.43. 邦訳書 I巻 86頁
- (31) *ibid.*, p.72. 邦訳書 II巻 6頁
- (32) *ibid.*, p.85. 邦訳書 II巻 31頁
- (33) *ibid.*, p.139. 邦訳書 II巻 132頁
- (34) *ibid.*, p.139. 邦訳書 II巻 134頁
- (35) *ibid.*, p.169. 邦訳書 II巻 191頁
- (36) *ibid.*, p.170. 邦訳書 II巻 193頁
- (37) *ibid.*, p.182. 邦訳書 II巻 215頁
- (38) *Trade Union*, p.102. 前掲書 114頁
- (39) H.J. Laski, *Faith, Reason, And Civilization*, The Viking Press, 1944. p.99., [中野芳夫訳 『信仰・理性・文明』 岩波書店 1951年 104～5頁]
- (40) *The American Democracy*, p.48. 邦訳書 I巻 96頁
- (41) *ibid.*, p.755. 邦訳書 I巻 214頁
- (42) *ibid.*, p.732. 邦訳書 I巻 176頁
- (43) *ibid.*, p.77. 邦訳書 II巻 15頁
- (44) 1940年代後半から、ソ連の脅威とともにアメリカやオーストラリアで行われたコミュニストや進歩的自由主義者を追放する運動で、アメリカのマッカーシー上院議員が先頭に立って行ったので、マッカーシー旋風とも言う。知識人や大学教授の犠牲者が数多く出た。
- (45) *The American Democracy*, pp.37～9. 邦訳書 I巻 74頁
- (46) 朝日新聞 2005年 9月 20日 朝刊 「米仏色違いの民主主義—トクヴィル再評価の三浦信孝・中央大学教授に聞く—」
- (47) J. Bryce, *Modern Democracies*, 1921, [松山武訳 『近代民主政治』 I～IV巻 岩波書店

1950 年] に出てくる名台詞で今日までその言葉が伝えられている。この書物に関する詳しい研究は宮本吉夫 『ブライスの「民主政治」』 井上書房 1959 年がある。

- (48) *The American Democracy*, pp.16~7. 邦訳書 I 巻 36 頁
- (49) *ibid.*, p.722. 邦訳書 I 巻 157~8 頁
- (50) 松本礼二著 『トクヴィル研究』 東京大学出版会 2006 年 11~12 頁
- (51) マーチンの伝記ではラスキの「アメリカ論」に対して、比較的中立的で好意的受け止め方をしているが、ディーンはマルクス主義の視点が多く見られることを指摘している。また、比較的最近では、新しい見方を提供する本も出ている。M. Newman, *Harold Laski A Political Biography*, MacMillan, 1993. , I. Kramnick and B. Sheerman, *Harold Laski A Life on The Left*, Hamish Hamilton, 1993. , P. Lamb, *Harold Laski : problem of democracy, the sovereign state, and international society*, McMillan, 2004.